愛着スタイルが曖昧なポジティブ感情の判断に与える影響

○中村杏奈¹²・下山晴彦¹

(1) 東京大学大学院教育学研究科・2 国立精神神経医療研究センター神経研究所)

キーワード：愛着、回避、表情認知

Attachment style affects the recognition of vague positive facial expressions

Anna NAKAMURA¹² and Haruhiko SHIMOYAMA¹(¹Graduate School of Education, Univ. of Tokyo, ²NCNP)

Key Words: attachment, avoidance, facial expression recognition

目 的

人は乳幼児期から、他者との親密な関係を通して愛着スタイルを形成し (Bowlby, 1969)。自己のモデルは“自分は他者から見捨てられるのではないか”という「不安」、他者のモデルは“助けを求めた時に助けてもらえる”という期待の裏返しである「回避」としてそれぞれ概念化され、情動処理機能に大きな影響を与えるとされる。

対人交流における情動処理の主要な要素に、表情認知 (= 他者の表情から感情を読み取ること) が挙げられる。不安の高さは、表情をネガティブに認知するバイアスを強めることが示されてきた (Niedenthal et al., 2002)。一方で、回避が強い人は表情がないことを判断するまでに時間がかかり (島 et al., 2012)、認知的アクセシビリティの低さと関連することが指摘される。

愛着スタイルと表情認知の関連を調べたこれまでの研究では明白な表情への反応や、表情のサブリミナル効果を調べたものはあるが、生態学的により妥当性が高い「曖昧かつ短時間の表情」への反応は明らかになっていない。本研究では、表情の強さを操作した上で短時間表情を提示し、愛着スタイルが曖昧な表情への反応にどのような影響を与えるか検討することを目的とする。これによって、愛着スタイルが実際の対人交流における他者の情動認知に与える影響を検討することが可能となる。

方 法

大学生 58 名が参加した。精神疾患の既往がある者は除外された。愛着の測定には、日本語版“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度 (ECR-GO; 中尾・加藤, 2004) を用いた。2 つの因子「不安」「回避」の平均を用いて実験参加者を「不安低-回避低」「不安低-回避高」「不安高-回避低」「不安高-回避高」の愛着スタイル 4 群に分けた (表 1)。各群で実験参加者の属性に差はなかった (年齢: $F(3,54) = 1.24, p = .31$; 性別の割合: $F(3,54) = .41, p = .74$)。

表情の強さを操作した表情認知課題を利用した。顔表情データベース DB99 (ATR) を元にモーフィング加工を行い、表情の種類 2 水準 (喜び/悲しみ) と表情の強さ 4 水準 (100%/75%/50%/25%) を操作し、真顔を加えた 9 条件が用意された。各試行では、1000 ms の注視点提示の後、表情刺激が 100 ms 間提示され、その後「嬉しい」「無表情」「悲しい」の 3 択で回答を求めた。各条件 8 試行、全 72 試行を行った。ローデータは反応時間が平均 $\pm 2SD$ を外れたものを除外した上で、Corwin (1994) の 2HT モデルを用いて「表情認知の正確さ」に変換された。この変数は 0~1 の範囲を取り、値が大きいほど正確さが高いことを示している。

表 1. 各実験参加者群の属性

	高群		低群	
	高群 (n = 16)	低群 (n = 10)	高群 (n = 13)	低群 (n = 19)
不安				
回避				
男性	11	7	8	10
年齢	21.16 $\pm$ 2.03	21.54 $\pm$ 1.08	20.70 $\pm$ 1.85	20.44 $\pm$ 1.12

n.s.

n.s.

結 果

表情の種類と表情の強さを被験者内要因、愛着スタイルを被験者間要因として、 2×4 の反復測定 ANOVA を実施した。愛着スタイルは主効果を持たなかった ($F(3, 54) = 1.01, p = .40$)。一方で、愛着スタイル*表情の強さは表情認知の正確さに有意な影響を持ち ($F(6.19, 111.37) = 2.15, p = .02$)、愛着スタイル*表情の種類*表情の強さにも弱い傾向があった ($F(7.14, 128.46) = 1.91, p = .07$)。そこで、各条件での表情認知の正確さを比較したところ、喜び 25% 条件でのみ群間に有意な差が見られた ($F(3.54) = 5.70, p = .002$; 図 1)。悲しみ条件ではいずれも統計的に有意な差は見られなかった。

以上の結果から、回避が強い者はそうでない者に比べて曖昧な喜び表情の認知において正確さが低いこと、不安の高さは表情認知に影響を与えていないことが示された。

図 1. 喜び条件における各群の表情認知の正確さ (** $p < .01$, *** $p < .005$)

考 察

回避の高さが表情認知の正確さを抑制することが明らかとなった。回避傾向の高さは、悲しみ表情ではなく曖昧な喜び表情の検出を阻害することが明らかとなり、他者の肯定的な情動を回避する、すなわち期待しない特徴があることが分かった。一方で、不安が表情認知の正確さに与える影響は見られなかった。本研究は愛着スタイルが曖昧かつ短時間の表情に対する反応に与える影響を検討した初めての研究であり、より生態学的妥当性の高い検討が可能となった。表情の種類が限られていたこと、表情刺激が愛着対象ではなく一般他者だったことは本研究の限界であろう。

引用文献

- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss. Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Corwin, J. (1994). On measuring discrimination and response bias: Unequal numbers of targets and distractors and two classes of distractors. *Neuropsychology*, 8, 110-117.
- 中尾達馬・加藤和生. (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- Niedenthal, P. M., Brauer, M., Robin, L., & Innes-Ker, A. H. (2002). Adult Attachment and the Perception of Facial Expression of Emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 419-433.
- 島義弘・福井義一・金政祐司・野村理朗・武儀山珠実・鈴木直人. (2012). 内的作業モデルが表情刺激の情動認知に与える影響. 心理学研究, 83, 75-81.
- Suslow, T., Kugel, H., Rauch, A. V., Dannilowski, U., Bauer, J., Konrad, C. (2009). Attachment Avoidance Modulates Neural Response to Masked Facial Emotion. *Human Brain Mapping*, 30, 3553-3562.